

(なんだ、これ)

混乱する。

敵は、いま二小隊ほどか。ここにいる仲間より、少し多いくらいだ。みな、得物は剣や槍。棍棒などもあるが、そう派手な火力はないらしい。

高杉の向こうで、へっぴり腰で刀を振りまわしているのは茨木か。生きて動いている仲間は、二十に満たない。少し見まわしたが、仲間のなか、坂本の姿はなかった。やつあたるさきは、敵と桂。

「いきなりつてソレこつちの台詞うううう！ いきなりナニこれエエエエ!! 夢? 夢か?! 夢だと云ってくれ、おまえの欲しがってたあの侍のスカジャンあげるから!!」

喚きながらも手は止めない。状況に立ち止まって凍んでしまえば、すぐに死ぬとわかっていた。

夢のはず、なのに。

(なんで)

呆れながら怒鳴る、背後からの声。

「なんの話だ! 動きながら寝てたのか、貴様は!!」

耳を打つ、あまたの音。腹から声を出さなければ、この状態では届かない。

だから声をはりあげる癖が、全員についた。

そうしなければ、なにも伝わらないからだ。

桂や坂本は、いまでも、そんな癖を残している。

素でうるさいふたりを思い返し、銀時は状況のおかしさをなおさを感じた。

ここに――戦場に立っていると、ここがふつうの場所に思えてくる。

だが、そんなわけではない。

銀時の《いま》は、ここにはない。そのはずだ。

戦争はとうに終わったし、少年と呼ばれてもいた自分たちは成人して、それどころかもうそろそろ、おっさんの域に届く。

偽りのうえにも平和はあつて、希望としてはのんびりと、日々を過ごしているのに。

桂とは数年のブランクのあと、ちよくちよく逢うようになって、いろいろ巻き込まれたり仕事の依頼があつたりこつちから(おもに情報面で)協力を仰いだり、なんだかつかず離れずでいる。

坂本は宇宙を駆けまわっていて、ごくたまに関わるとドデカイ迷惑を降らせてくれる。

隻眼になった高杉は、狂気のまま破壊行動に走り、とうとう自分とも桂とも決別した。

それが、《いま》のはずだ。